

1 次の文章を読んで、あとの(1)～(10)の問いに答えなさい。

思春期の入り口で、多くの子どもたちが不安や孤独感に叩きのめされそうになる。しかし、彼らはただ叩きのめされ、それを耐え忍んでいるわけではない。自分は一人で生きている、孤独であるという事実に向き合い、そしてそれを誰かと共有したとき、子どもたちの心には、それまで経験したことのない希望や期待の感情がわき上がってくる。

つまり、不安や恐れと希望や期待の感情は、子どもたちの心に同時に宿っているのである。ただネガティブになっているわけでもなく、むやみとポジティブになっているわけでもない。子どもたちは、その両極を大きな振り子のように行ったり来たりしている。

思春期、青年期は疾風怒濤の時期であるとか、感情の起伏が激しいと言われる背景には、こうした感情の揺れも原因の一つとしてあるだろう。

「いのちの体験」とは、私たちのヤギ殺しの目撃体験のように、場合によっては死や死体そのものに端を発するものであったり、あの理科の実験室で体験した、自分自身への問いかけであったり、いのちの根源的な意味を問う体験である。

「生きる意味とは？」という解決することのない、決して正解を得られないことのない根源的な問いかけは、子どもたちに重くのしかかる。だからこそ、その重い荷物を一緒に持ち上げてくれる誰かが必要なのだ。

私に三人の仲間がいたように、千尋やハリーやゴードイにも、支えてくれる仲間がいた。「自分は何のために生まれてきたのだろう」という、解決不能な問いを突きつけられ苦しんでいるときに、その重い荷物を一緒に持ってくれる仲間がいたのである。友だちや仲間が大切だということは、つまりそういう意味である。

もちろん思春期の大事な時期を一緒に過ごした仲間と、生涯を通してつき合える人間関係をキズけるかもしれないが、ある時期だけの密度の濃い関係で終わることが多い。思春期の入り口にいるときの仲間とは、そういうものだ。

では、仲間と離れたら、また重い荷物を一人で背負わなければならないのか。そうではない。重い荷物を仲間と分け合って、人生という名の列車の網棚に載せることができたという体験が重要なのだ。そこに、「共有体験」という大きな意味が生まれる。共有とは、フロム^注の言葉を借りれば「愛すること」であり、同じ思いを分かち合う

— 1 —

ことだ。孤独と不安におびえているとき、自分の身近にいる誰かも自分と同じような思いを経験したことがあるんだ、あるいは今自分と同じような不安を抱えているんだとわかれば、子どもは安心する。もうひとりぼっちではないと思えるからだ。

千尋もハリーもゴードイも、「なぜ生まれてきたのか」「なぜ生きていくのか」「生きる意味とは何か」といった、重い荷物の存在に気づき、ふらつきながらも仲間とともにそれを抱え共有したときに、彼らはその荷物を網棚に載せたのである。

それは考えてもエイクユウに答えの得られない問いであり、このまま一人で抱えていたら押しつぶされてしまう。もういいや、これで悩むのは終わりにしよう、えいと網棚の上に載せてしまおう。こうした心理体験を、私は「棚上げ」と呼んでいる。

「いのちの体験」を経験し、そこで思わぬ重い荷物を背負わされた子どもたちが、誰かとその悲しみや苦痛を共有し、分かち合えたときに、棚上げ作業が可能になる。今までさんざん自分を苦しめてきた重い荷物を「棚上げ」してしまおうと、どこかにせつなさのこしながらも、気持ちがすうっと楽になり、生きる希望がわいてくる。

そこで出合った希望や期待は、 とは異質のものである。子どもがはじめで自分の足で自分の人生に一歩足を踏み出すことができたという自信、そして自分という存在へのエールなのだと私は考えている。

いのちの秘密を知りたいという欲求は、言い換えればいのちの確認であり、自分自身の存在の確認であり、自分は一人ではないという孤独感の克服のための作業である。棚上げ作業ができたときに、死の恐怖や孤独と決別し、はじめて自分のいのちの大切さを実感できる。「自分は決して一人じゃないんだ」という安心感とともに、「生きていていいんだ」「ここにいていいんだ」という、自己を肯定する気持ちが生まれてくる。その自分を大切だと思う気持ちが、人間として生きる強さにつながっていくのである。

私は理科の実験室で感じた「宇宙の果てにひとりぼっちで放り出される恐怖」を、自分の心に急ブレーキをかけ、思いきりギアチェンジするようにして振り払った、と述べた。

しかし、そのときは一人だったじゃないか。両親にも友だちにも何も話さなかったじゃないかという疑問を持つ人もいるだろう。確かに私は一人で重い荷物を渾身の力で網棚に載せた。それができたのは、それまで何度か「いのちの体験」を経験し、無

— 2 —

意識のうちに棚上げるコツを学んでいたからではないかと思う。

いじめの問題もそうだし、何度も転校して、まったく見知らぬ世界に放り込まれる体験もまた孤独と不安に向き合う経験だった。そんな中で、助けてくれる友だちがいたり、親子のコミュニケーションがあつたり、都会から来た先生と仲よしになったりすることで、私は何度も不安を棚上げてきたのだと思う。

「いのちの体験」は、一度きりではない。⑥ささいなことから、自分の存在を揺るがすような大きなことまで、地震のマグニチュードのように⑦キボの異なる形で子どもたちに訪れる。小さな子が「夜中に一人でトイレに行くのが怖い」「夜寝るとき真っ暗になるのが怖いから、電気をつけておいて」と言うのも、生まれてからずっと一緒に暮らしてきた愛犬がある日突然、交通事故で死んでしまったという大きなショックも、同質のいのちの体験なのである。そのつど親の助けを借りたり、仲間の助けを借りたりして、子どもたちは不安や孤独を棚上げし、⑧また自分の日常に帰っていく。

では、そうした子ども時代に棚上げた荷物は、もう落ちてこないのだろうか。そんなことはない。人生にはいろいろなことがある。失恋や挫折、あるいは愛する人の死など、おとなになってからもいくらでも⑨シレンは襲いかかってくる。とくに愛する人を失う悲しみは、おとなとて容易に乗り越えられるものではない。そんなときにまた棚に上げてあつたはずの重い荷物が転がり落ちてくるのである。

しかし、子ども時代に、それも一〇歳⑩前後の時期にしっかりと重い荷物を棚上げすることができた人間は、またひょいと棚に載せる術と力を持っている。つまり挫折に耐える生きる力を持っているということだ。その術を持たないおとなは弱い。自分をいたずらに痛めつけ、生きる氣力をなくし、あげくの果てには恨みを他人に⑪転嫁して自暴自棄になる。

私が一〇歳前後の時期のいのちの体験が重要だと言うのは、そこでの棚上げ体験が子どもがおとなになっていくときの人格形成の大きな基盤になると考えるからである。

(近藤卓『死んだ金魚をトイレに流すな』)

- 3 -

注 ネガティブ……消極的

ポジティブ……積極的

千尋やハリーやゴードイ……「千尋」は、映画「千と千尋の神隠し」の主人公。「ハリー」は、映画「ハリー・ポッター」シリーズの主人公。「ゴードイ」は、映画「スタンド・バイ・ミー」の主人公。

フロム……エーリッヒ・フロム（ドイツの社会学者・心理学者）

(1) 線①③⑦⑨のカタカナを漢字に改めなさい。

(2) この文章には、次の一文がぬけています。どこに入れるのがふさわしいですか。その直前の五字を答えなさい。(。は字数に数えます)

自分では意識はしていないが、これも「棚上げ」作業だったと思う。

(3) 線②「重い荷物」とは、どのようなものですか。説明しなさい。

(4) 線④「こうした心理体験を、私は『棚上げ』と呼んでいる」とありますが、「棚上げ」に「」がつけられているのは、なぜですか。次のア～オの中から最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

ア 「なぜ生きていくのか」を実感することができ、生きる希望がわいてくる体験であることを強調するため。

イ 人生という列車の網棚に、重い荷物を載せることができる体験であることを強調するため。

ウ 重い荷物を背負っていることに気づき、それを下ろすことのできる体験であることを強調するため。

エ 友だちや仲間と不安や恐れを分かち合うことで、それらと決別することができる体験であることを強調するため。

オ 悩みが解決不能のものであるので、一時的に楽になるための体験であることを強調するため。

(5) に入れるのに最もふさわしいことばを、次のア～オの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 幼かった頃の無邪気な夢
イ ひとりぼっちの不安や孤独
ウ 生きていくことへの恐怖感
エ 自分たちの楽しい日常
オ 一生大切となる生き方

(6) — 線⑤「自分という存在へのエールなのだ」とは、どういうことですか。次のア～オの中から、ふさわしいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 「棚上げ」できたときの希望や期待は、自分は生きていていいのだとはげましてくるものだということ。
イ 自分自身の存在を確認することは、棚上げ作業ができたという自信につながっていくということ。
ウ 「棚上げ」できたときの希望や期待は、自分の人生を自分自身で決定できたという喜びだということ。
エ いのちの秘密を知りたいという欲求を「棚上げ」できたときの希望や期待は、自分自身を応援してくれるということ。

オ 棚上げ作業ができたということは、自分自身の存在を確認できたという安心感が生まれることだということ。

— 5 —

(7) — 線⑥「ささいな」⑪「転嫁」の意味として正しいものを、それぞれ次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ⑥ ささいな
ア こまかくくわしいこと
イ 何度も起こること
ウ わずかな、取るに足りないこと
エ まったく見たこともないこと
オ とても簡単なこと

- ⑪ 転嫁
ア 解決してもらうこと
イ 相手にゆだねること
ウ そのままにしておくこと
エ 流れにまかせること
オ 責任をなすりつけること

(8) — 線⑧「また自分の日常に帰っていく」とありますが、なぜこういうことが可能となるのですか。それを説明した次の文の にあてはまる語句を、字数に合うように、文章中からぬき出して答えなさい。(。は字数に数えます)

子どもたちが、 ^a ^b ^c ^d ^e ^f ^g ^h ⁱ ^j ^k ^l ^m ⁿ ^o ^p ^q ^r ^s ^t ^u ^v ^w ^x ^y ^z ^{aa} ^{ab} ^{ac} ^{ad} ^{ae} ^{af} ^{ag} ^{ah} ^{ai} ^{aj} ^{ak} ^{al} ^{am} ^{an} ^{ao} ^{ap} ^{aq} ^{ar} ^{as} ^{at} ^{au} ^{av} ^{aw} ^{ax} ^{ay} ^{az} ^{ba} ^{bb} ^{bc} ^{bd} ^{be} ^{bf} ^{bg} ^{bh} ^{bi} ^{bj} ^{bk} ^{bl} ^{bm} ^{bn} ^{bo} ^{bp} ^{bq} ^{br} ^{bs} ^{bt} ^{bu} ^{bv} ^{bw} ^{bx} ^{by} ^{bz} ^{ca} ^{cb} ^{cc} ^{cd} ^{ce} ^{cf} ^{cg} ^{ch} ^{ci} ^{cj} ^{ck} ^{cl} ^{cm} ^{cn} ^{co} ^{cp} ^{cq} ^{cr} ^{cs} ^{ct} ^{cu} ^{cv} ^{cw} ^{cx} ^{cy} ^{cz} ^{da} ^{db} ^{dc} ^{dd} ^{de} ^{df} ^{dg} ^{dh} ^{di} ^{dj} ^{dk} ^{dl} ^{dm} ^{dn} ^{do} ^{dp} ^{dq} ^{dr} ^{ds} ^{dt} ^{du} ^{dv} ^{dw} ^{dx} ^{dy} ^{dz} ^{ea} ^{eb} ^{ec} ^{ed} ^{ee} ^{ef} ^{eg} ^{eh} ^{ei} ^{ej} ^{ek} ^{el} ^{em} ^{en} ^{eo} ^{ep} ^{eq} ^{er} ^{es} ^{et} ^{eu} ^{ev} ^{ew} ^{ex} ^{ey} ^{ez} ^{fa} ^{fb} ^{fc} ^{fd} ^{fe} ^{ff} ^{fg} ^{fh} ^{fi} ^{fj} ^{fk} ^{fl} ^{fm} ^{fn} ^{fo} ^{fp} ^{fq} ^{fr} ^{fs} ^{ft} ^{fu} ^{fv} ^{fw} ^{fx} ^{fy} ^{fz} ^{ga} ^{gb} ^{gc} ^{gd} ^{ge} ^{gf} ^{gg} ^{gh} ^{gi} ^{gj} ^{gk} ^{gl} ^{gm} ^{gn} ^{go} ^{gp} ^{gq} ^{gr} ^{gs} ^{gt} ^{gu} ^{gv} ^{gw} ^{gx} ^{gy} ^{gz} ^{ha} ^{hb} ^{hc} ^{hd} ^{he} ^{hf} ^{hg} ^{hi} ^{hj} ^{hk} ^{hl} ^{hm} ^{hn} ^{ho} ^{hp} ^{hq} ^{hr} ^{hs} ^{ht} ^{hu} ^{hv} ^{hw} ^{hx} ^{hy} ^{hz} ^{ia} ^{ib} ^{ic} ^{id} ^{ie} ^{if} ^{ig} ^{ih} ⁱⁱ ^{ij} ^{ik} ^{il} ^{im} ⁱⁿ ^{io} ^{ip} ^{iq} ^{ir} ^{is} ^{it} ^{iu} ^{iv} ^{iw} ^{ix} ^{iy} ^{iz} ^{ja} ^{jb} ^{jc} ^{jd} ^{je} ^{jf} ^{jj} ^{jh} ^{ji} ^{jj} ^{jk} ^{jl} ^{jm} ^{jn} ^{jo} ^{jp} ^{jq} ^{jr} ^{js} ^{jt} ^{ju} ^{jv} ^{jw} ^{jx} ^{ky} ^{kz} ^{la} ^{lb} ^{lc} ^{ld} ^{le} ^{lf} ^{lg} ^{lh} ^{li} ^{lj} ^{lk} ^{ll} ^{lm} ^{ln} ^{lo} ^{lp} ^{lq} ^{lr} ^{ls} ^{lt} ^{lu} ^{lv} ^{lw} ^{lx} ^{ly} ^{lz} ^{ma} ^{mb} ^{mc} ^{md} ^{me} ^{mf} ^{mg} ^{mh} ^{mi} ^{mj} ^{mk} ^{ml} ^{mm} ^{mn} ^{mo} ^{mp} ^{mq} ^{mr} ^{ms} ^{mt} ^{mu} ^{mv} ^{mw} ^{mx} ^{my} ^{mz} ^{na} ^{nb} ^{nc} nd ^{ne} ^{nf} ^{ng} ^{nh} ⁿⁱ ^{nj} ^{nk} ^{nl} ^{nm} ⁿⁿ ^{no} ^{np} ^{nq} ^{nr} ^{ns} ^{nt} ^{nu} ^{nv} ^{nw} ^{nx} ^{ny} ^{nz} ^{oa} ^{ob} ^{oc} ^{od} ^{oe} ^{of} ^{og}

自分でバレエ教室を探したと言った。いまごろからはじめても遅いんじゃないか、と反対する両親を半年かけて説得したのだと言った。

「もっと小さいときから習ったほうがいいって知ってる。あたしね、低学年の子たちのクラスでレッスンを受けることになってるんだ。ちょっと恥ずかしいんだけどね。でも、いいの。プリマドンナになるためじゃなくて、ただバレエがしたいだけだから。うまく言えないけど、あたしは、あたしが行ける、いちばん先のところまで行けたらそれでいいって思ってる」

目の前の、キラキラと光を溢す少女が沙也佳だとは思えなかった。

沙也佳のどこに、こんなにくさんのことばがねむっていたのか、ふしぎでならなかった。

待ってー、待ってー。

いつも泣きべそをかいていた、おチビちゃんの沙也佳。

香南が風邪で休んだ日、ひとりでは習字教室に入ることができず、扉の外でずっと泣いていたという沙也佳。

それが、いつの間に……。

沙也佳の声を聞きながら、香南は頬の裏をこっそりと噛んでいた。

どこかへ行くとき、 のはいつもわたしの役目だったのに……。

口のなかに、かすかに血の味が広がる。

あたしが行ける、いちばん先のところ。

沙也佳はいつも、それを見ようとしていたのだろうか。

そしていつの間にか、わたしの手を離しても平気になっていたのだろうか。

あの日まで、未来という遠くへ先に歩きだすのは自分だと思っていた。

午後のこの時間、祖母はいつも、玄関から入ってすぐの自分の部屋で昼寝をする。玄関の戸を引き開けると、チリンチリンとベルが鳴る。祖母が目覚まし、顔をのぞかせるかもしれない。

香南は家にもどると庭へまわり、 ⑥ 気配をころして縁側から上がった。居間は、午前中とかわらない静けさのなかに沈んでいた。

一時五十一分。 ⑦ ニュースの時間まで、東京の空を見るまで、あと九分。

でも、ふと心をかすめた。

東京なんて、ほんとうにあるのだろうか。

昨日ね……。

沙也佳がは ⑧ んだようにそう切りだしたのは、夏休みがはじまるすこし前の、学校からの帰り道だった。

九月から、高学年のクラスでレッスンを受けていいって言われたの。

へえ、よかったじゃない。

香南は笑顔で返した。

けれどほんとうは、胸のおくがざわざわと鳴り、 ⑩ 毛羽立っていくのを抑えられなかった。

あたしが行ける、いちばん先のところ。

沙也佳の「いちばん先」がどこまでもどこまでも、東京なんかよりずっと遠くまでつづいているように思えた。その遠さがこわかった。

夏休みに入ってから十日間、香南は「今日の予定」と電波時計を必死にみつめてすごしてきた。自分の未来と、未来につづく道を見失わないためには、そうするよりほかなかった。

 ⑪ でも――

もう、とつくに気づいていた。

偏差値の高い中学に行くことも、東京の大学に行くことも、わたしが手に入れないものじゃない。

待ってー、待ってー。

思いきり伸ばすことができない、頼りなげな手。声にならない、ちぎれそうな思い。

待ってー、待ってー。

とそのとき、名前を呼ばれたような気がした。

かなちゃん――

玄関脇の茂りすぎたあじさいの株を、膝であしらう音がする。

触れるとかさかさと鳴る南天の枝を、腕で払う音がする。

沙也佳？

あわてて両方の頬をぬぐって、外に目をやる。庭にたった白い光。その光が揺れ

る。

画板とふたつの絵の具セットを持った沙也佳が立っていた。

「かなちゃん、だいじょうぶ？」

沙也佳は光のなかから、くつきりとした声を投げてよこした。

「上がってもいい？」

うなずくと、沙也佳は持っていたものを縁側に置き、たしかな足取りで座敷を歩いてきた。そして、香南に寄り添うようにしずかに腰を下ろした。腕のあたりに、沙也佳の体温が伝わってくる。ジリジリとはなく、ふんわりと陽に灼かれた温もりだ。耳に届くのは、台所から聞こえてくる冷蔵庫がたてる低い音だけだった。

香南は、電源の入っていないテレビを見据えていた。そこには、ならんですわるふたりがひそやかに映り込んでいる。

「なによ。なんで沙也佳までもどって来ちゃったのよ。せつかく広瀬くんとふたりにしてあげたのに。バツカじゃないの！」

「広瀬くん？」

沙也佳はゆっくりと首を振った。

「広瀬くんは関係ない。あたしは、かなちゃんが心配だったの」

えっ？

テレビに映った沙也佳と目があつた。

「かなちゃんが苦しそうだつたから。毎朝ラジオ体操で会った時に、かなちゃんの苦しそうな声が聞こえてきたから……」

でも、と沙也佳は口ごもった。

「塾のことはなにもわからないし、受験のことであたしが助けてあげられることなんてなにもないし……。だから、考えたの。せめて塾のない日に、かなちゃんをどこか気持ちいいところに誘おうって。でも、どこへ行けばいいのか、ぜんぜん思いつかなかった」

今日の午前中、ピッピのエサを買いにいった帰りに偶然、桜の木の下でスケッチしている広瀬くんを見かけた。スケッチブックをのぞくと、そのなかにステキな風景があった。ここがいいのかもしれない。ここならリラックスできるかもしれない、と思った。

⑬そこまで一気に言うと、沙也佳は香南のほうを向き、すこしだけわらった。

「それに、遊びに行こうなんて誘ってたら、かなちゃんは行かないって言うに決まってるでしょ。かなちゃんは、いつだって自分を甘やかさないもん。一度勉強するって決めたら、ぜったい勉強する人だもん。熱があっても、おなかが痛くても。だから、写生の宿題をしようって誘ったの。それなら、うんと言ってくれるかもしれないって思ったから」

香南はなにも言えず、ただじつと沙也佳の話を聞いていた。

暗いテレビ画面をみつめるしかできなかった。

これがほんとうの「途方に暮れる」なのだろうと思った。でも、からださがら

□うになつたり、手足の先が消えていくような感覚はなかった。

わたしもみつけれられるかな。

わたしにも目指せるのかな。

わたしが行ける、いちばん先のところ、を。

「ごめんね、かなちゃん。なんの役にも立てなくて」

テレビ画面のなかで、沙也佳がうつむく。

いちばん先をいつか見たい、と思う。

でもいまは、風が見たい。沙也佳といっしょに、この町に吹く風を見ていたい。

「ねえ、沙也佳。もう一度あそこに行こう。風が見えるところなんて、そうあるもんじゃないし、今年はおそこで写生しよう。ね、そうしよう。それに、なんか広瀬くんのことも放っておけないしね。でしょ？」

「かなちゃん！」

顔を上げた沙也佳の頬が、盛大に膨れていく。

「言っとくけどあたし、広瀬くんのこと、べつになんとも思っていないから。それだけは、かなちゃんの誤解だからね」

「はい、はい。でも、けっこういい感じに見えたけどなー」

「どうしてそんな勘違いするのか、ぜんぜんわかんない！」

沙也佳はブイッと顔を背けると、畳を蹴りつけるようにして立ちあがった。でも、膨れていた頬にはすぐに、ふわりとした笑みがうかんだ。

「行こ、かなちゃん」

沙也佳の左手が、目の前に差しだされる。その手を握り、香南も立ちあがる。

— 14 —

(7) —線⑩「時計」は「日」「寺」「言」「十」を組み合わせてできている漢字のことばです。同じようにことばをつくるとき、次の1〜4の組み合わせの□にあてはまる漢字を、例にならって答えなさい。

(例) 日 十 寺 □ …… □ が「言」となれば「時計」ということばができるから、
答えは「言」。

- 1 非 口 鳥 □
- 2 田 力 重 □
- 3 口 貝 木 □
- 4 人 日 木 □

(8) 文章中にはテレビに関する表現がたびたび見られます。テレビはどんなはたらきをしていると言えますか。次のア〜カの中からその説明としてふさわしいものを二つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 香南にとって、未来への希望をつないでいく数少ない手がかりとなっている。
- イ 香南にとって、都会へのあこがれをかきたてるひとつのきっかけとなっている。
- ウ 香南にとって、東京の情報を知ることのできるただひとつの手段となっている。
- エ その画面は、香南が沙也佳と過ごした日の思い出をかざる額縁がく縁となっている。
- オ その画面は、香南が自分の中の沙也佳への思いを見つめなおす鏡かがみとなっている。
- カ その画面は、香南が沙也佳と自分とをくらべて見る精密な装置となっている。

(9) —線⑪「でも」——とありますが、ここでの香南の気持ちの説明としてふさわしいものを、次のア〜オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 沙也佳の未来への足取りの確かさとくらべて、自分の夢は色あせて見え、泣きたくなるような心細さにおそわれている。

イ 沙也佳のいちばん先がはるか遠くに思えて不安であり、自分も目標をたててがんばっていたが、もう追いつけないとあきらめている。

ウ どんどんと成長していく沙也佳を見ては、おさなく頼りなげだったところが思い出され、あまりの変化にくやしさを感じている。

エ 一人でも両親を説得し、やりたかったバレエを始めた沙也佳に対し、目標もなくただ受験をするだけの自分を恥ずかしく思っている。

オ 願いを着実にかなえていく沙也佳の様子とは逆に、手に入れたいものが遠ざかっていく感じがする自分の今が情けなくなっている。

(10) —線⑮「膨れていた頬にはすぐに、ふわりとした笑みがうかんだ」とありますが、ここでの沙也佳の気持ちの説明としてふさわしいものを、次のア〜カの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 広瀬とのことはここでは関係ないのに指摘しとされてくやしさが、仲直りのためあえて明るくしようとしている。

イ 広瀬のことを突然言われてあわてたけれど、元気になった香南とのこれからを想像して楽しくなっている。

ウ 広瀬のことを言い出す感覚は理解に苦しむが、香南の機嫌きげんがもとにもどったとわかってほっとしている。

エ 広瀬とのことは間違いなので承知できないが、香南は自分に注目してくれていたのだと思いうれしくなっている。

オ 広瀬のことを誤解されたのはいやだけれど、香南が明るい様子で接してくれるようになって安心してている。

(11) —線⑯「よかった、夏休みはまだたっぷり残ってる」とありますが、香南がこのように思うのは、どういうことに気づいたからですか。五十文字以内で答えなさい。
(ハ。は字数に数えます)

次の文章を読んで、あとの(1)～(11)の問いに答えなさい。

バスは混んでいた。

二十年前のはなしだから、乗り物の数も少なく、おまけに乗る人間も冬は厚着であつた。家の中も街も今よりずっと寒く、人は暗い色の冬支度に着ぶくれて、殺気立って朝晩のラッシュに揺られていた。

その朝も、私は吊革にもブラ下かれず、車の真ん中で左右から人に押されながら、週刊誌を読んでいた。

押し□□□□□□□□の中で、二つ折りにした週刊誌のページをめくろうとすると、

「あ」

という声がする。

声の主は、黒い学童服を着た小学生低学年らしい男の子で、私の胸のところに押しつけられている。その子は、ちよつと口をあき、訴えるような目で私を見た。週刊誌の向こう側には、漫画が載っていた。彼は、漫画を読み終わらないうちにページをめくられたのだ。

私は漫画を少年に見せるようにしてまたしばらく揺られていた。少年の目が漫画の吹き出しのセリフの部分をつつくりと追ひ、声を出して読んでいる。おしまいまで読み終えたところで、少年は目を上げてまた私を見た。

バスが少し空いてきて、少年は次の停留所で降りる気配があつた。ところが、定期券を忘れたらしい。ポケットを探って困っている。

私が、

「忘れたの？」

とたずねると、怒つたような顔をしてうなずいた。私は、小銭入れからバス代を出し(十円だか十五円であつたかおぼえていない)少年の手に握らせた。少年は、小銭を握ったまましばらく外を向いて揺られていたが、降りぎわに胸のポケットから赤鉛筆を抜いて黙つて私に突き出した。ボール紙をむくと芯の出てる、当時としては珍しいもので、父親か誰かにももらったのであろう、十センチほどの使いかけであつた。黒革のランドセルを背負った小さい姿が、四谷の並木道を走ってゆくのを、私はバスの窓からちらつと見た。

少年の宝物だつたに違いない赤鉛筆を、私は大事なものをを入れるチョコレートの空箱に仕舞っておいたのだが、いつとはなしにどこかへいつてしまった。

つい最近、仔犬を連れた少年と顔馴染になった。

七つか八つの男の子で、引っぱっている黒の仔犬が、テリアかなにかの雑種らしいがなんとも可愛い。少年はこの犬が自慢らしく、まあ可愛いと声をかけそうな私の気配をサツしてか、わざとゆつくり歩いている。はにかみ屋の癖に犬を賞めてもらいたいのだ。

「なんていう名前？」

とたずねると、黒い犬の頭をなでながら小さな声で、

「クンタ」

と教えてくれた。

テレビで放映され評判になった黒人迫害史『ルーツ』の主人公クンタ・キンテから取つたのであろう。アパート住まいで犬は力えないので、私はよく他人様の犬で憂さばらしをする。この少年とクンタには、それから二、三回出逢い、いまお座りを仕込んであること、クンタはクツキが好物であることを教えてもらい、いっしょに遊ばせてもらった。

しばらくして、また少年に出逢った。

この日は犬を連れていなかった。「クンタ、大きくなった？」とたずねようとしたら、少年は突然大きな声で、

「ベエ！」

と叫び、舌を出して憎つたらしい顔をした。そして小走りに行ってしまった。

犬は死んだのも知られて行つたのか、いずれにしても少年のところには居ないのであろう。それから少年を見かけるが、道の端を、ちよつと拗ねた格好で歩いている。子供を持たなかったことを悔やむのは、こういう時である。

(向田邦子『眠る杯』)

(2) —線①「乗り物の数も少なく、おまけに乘る人間も冬は厚着であった」とありますが、これはどういう状況じきょうを表したのですか。次のア～オの中からあてはまるものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 街に、冬の着ぶくれた人たちがいっぱいいる状況。
- イ バス待つ人が、防寒のため厚着をしている状況。
- ウ 多くの人たちが、次々とバスに乗り込んでくる状況。
- エ 空いた通りに、乗客をいっぱい乗せてバスが走る状況。
- オ バスの中が混み合い、すき間もないくらい状況。

(3) —線ア～オの「れ」の中で、意味やはたらきが他と異なるものを一つ選んで、記号で答えなさい。

(4) —線②「押し」の□を補ってことばを完成させなさい。

(5) —線③「私を見た」、⑤「私を見た」はそれぞれどういう気持ちから「私を見た」のですか。次のア～オの中からふさわしいものをそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 漫画がおもしろかったよと伝えようとする気持ち
 - イ この漫画はたいしておもしろくないと訴える気持ち
 - ウ まだ読み終わっていないので待つてほしいという気持ち
 - エ 読んでいる最中なのでもう少し読み続けたいという気持ち
 - オ この漫画を読み終えたことを伝えようという気持ち
- カ 他にももしろい漫画はないのかと催促さいそくする気持ち

(6) —線④「週刊誌の向こう側」とはどういうことですか。次のア～オの中からあてはまるものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 私の隣となりにいる人が読んでいる雑誌のこと
- イ 私の見開いている週刊誌の片方のページのこと
- ウ 私のもつ週刊誌の男の子の方から見える側のページのこと
- エ 私の読んでいるページの隅すみつこにある漫画のこと
- オ 私の読んでいるページの裏に載っている漫画のこと

(7) —線⑥「怒ったような顔」とありますが、どうしてそのような顔をしたのですか。次のア～オの中からふさわしいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分の弱みにつけこまれて、ちよつと腹がたつたから。
- イ 困っている状況を見ぬかれて、いらだつたから。
- ウ 私のおせっかいを、うつとうしく思ったから。
- エ 忘れていたのがとうとうばれて、くやしがつたから。
- オ 自分が忘れたことを、認めたくなかつたから。

(8) —線⑦「降りぎわに胸のポケットから赤鉛筆を抜いて黙って私に突き出した」とありますが、それはどういうつもりだったのですか。二十五字以内で答えなさい。(、は字数に数えます)

(9) —線⑨「小さな声」から⑫「大きな声」へと、少年の「私」に接する態度が変わったことからどのようなことが読みとれますか。二十字以内で二つ答えなさい。(、は字数に数えます)

(10) —線⑪「憂さばらし」とありますが、ここではどういうことが「憂さばらし」なのです。次の文の□にあてはまる文章中のことばを十五字以内でぬき出して答えなさい。(、などは字数に数えます)

と。

(11) — 線⑬「子供を持たなかったことを悔やむのは、こういう時である」とありますが、この文章の二つの話について、筆者のこの気持ち表れている一文をそれぞれぬき出し、初めの五字で答えなさい。(。などは字数に数えます)



✖

1

(2)

(3)	

(4)

(5)

(6)

(7)
(6)
(11)

(8)		
e	d	a
		b
		c

(9)	前		後	
-----	---	--	---	--

[illegible]

2

A
B
C
D
E

1				ツト
2				ユース
3				ツクス

④
⑨

[illegible]

⑧
は

んだ
⑨
が
ら

う

1	
2	
3	
4	

--	--

(9)

10

[illegible]

